

宇都宮空襲の現場に立ち会って

小竹森正次 鹿沼市

当時の宇都宮市には日本陸軍の精鋭第14師団があり、街は軍人の姿があふれる軍都だった。現在の「桜通り」は、当時、「軍道」と称した通りの道である。近くには中島飛行場、東には清原飛行場などがあり、米軍にとつては重要な攻撃目標の都市だったのである。

●宇都宮に悲劇の歴史が刻まれた

私は15歳だった。その日、昭和20年7月12日夜遅く、私たち家族はただならぬ気配に飛び起きた。上田町にあった我が家から外に出てみると、北の角が真っ赤である。地上から見たこともない火炎が噴出し続けている。当時我が家は軍需工場を営んでいたため、駆けつけた従業員とともに危険物を整理し、家財道具を車に積み、南に向けて走り出した。

現在の貝島橋あたりであったか、鹿沼の空爆はやんだようだった。私は父母の反対を押し切り、わずかな食べ物をもって、在学していた学校（旧制中学）のある宇都宮に自転車で向かった。宇都宮に到着した時は翌日になっていた。まず母校の安全を確かめた後、次に市内の同級生の動向や私の学校保証人の安全確認をしたいと市内に向か

った。しかし市内は火の海。気持ちは焦るが、火の収まるのを待つほかはない。どうすることもできずに立ち尽くしていた。

●地獄を見た日

同級生のA君は現在の東武デパートの北側に住んでいた。私が訪れた時、A君はまだ熱い自宅の焼け跡に家族とともにいた。近所で体に焼夷弾が命中して亡くなった人がいるという、A君の話聞いて驚いた。

次に現在の池上町あたりだと思うが、大通りの北側に住むM君宅に向かった。当時は、来るべき空襲や火災に備え、軒先にコンクリートで囲った防火用水を備える家がたくさんあった。たまたまその一つの蓋を何気なく開けてみて衝撃を受けた。なんと、中には水に浮いた幼児の遺体があったのだ。私は頭の中が白くなった。ここまで連れて逃げてこの子だけでも助かれば、という親の思いを想像したが……この世の地獄を見た始まりである。M君の家は焼け方がひどく、M君にも会えず、また上町にひき返した（後日、生存を確認）。確か、材木町と東武駅の間のことと思うが、数人が防空壕の中をのぞいているので、私ものぞいてみて仰天してしまった。防空壕に避難したのはよいが、火災の高熱でもがき苦しんで亡くなった人の苦悩の表情を見てしまったのだ。10人ほど

だったろうか。それから先の記憶はあえて書かないことにする。

身も心もすっかり疲れ果てて、空腹のまま自転車を引きずり鹿沼にたどり着いた。

●P51の機銃掃射にあい、危機一髪

宇都宮の北西に源を発し、県庁の西を流れて、市内に入る釜川の大部分に蓋はなかった。空襲直後ではなかったが、焼け焦げた衣服がたくさん川べりに積まれていたのを見た。

そして、焼け焦げて誰とも判断のつかない、引き取りようもない遺体が町のあちこちに集められていた。今思い返すと、私は運が悪いのか、酷いところをあれこれ見てしまったような気がする。しかしこれは私の記憶に間違いなくある現実であり、けっして幻ではない。

後日、別の残酷な体験をするときが来た。7月も終わろうとするころ、私は誰に強制されるわけでもなく、国鉄（JR）宇都宮駅の南西約100mの所で焼け跡整理を手伝っていた。ほとんど焼けてしまつて、我々若年には何をすればいいのかわからず、国民服を着た人の指図に従っていたと思う。その辺りに住んでいた知人の安否がわかればいい、というくらいの気持ちだった。

正午を過ぎたころ、突然予想もしない事態が我々を襲った。何の前触れもなく、いきなり頭上

から、重火器の音と共にオレンジ色の光が焼けた道路の上を数本走ったのである。すぐそばにいた私はかつての経験から、機銃掃射のものにはさほど驚かなかったが、隠れる場所がないので戸惑った。

私は蓋のない防空壕に飛び込んだ。銃撃が数秒間途切れたので、次の銃撃までに無抵抗の地上の様子を見ようとして外に出たとたん、艦載機から飛び立ったP51戦闘機が数十機の超低空から窓を開けてこちらを見ているではないか。つまり、乗員の顔をはつきりと見てしまった。そしてまた銃撃を繰り返すのだった。その後、目にしたものは、背中を射抜かれた人、鼻を飛ばされた人、血だらけであちこちに倒れている人々…。中学生も多いように思えた。まさにこれが自分が生きている今なのだ、日本の今なのだ、と思い知らされた。

●学校保証人の安否

数日後、再び国鉄線（当時はSL）で宇都宮に私の保証人の安否を確かめに出かけた。保証人は宇都宮師団の名の知れた将校で南方戦線を歴戦、負傷の後帰還して宇都宮師団に勤務していた。当時の曲師町、今のオリオン通りの自宅は跡形もなく、見つけようもなかったが、後日無事を確認することができた。

ちなみに、私の学校の保証人A氏宅には時々泊

まらせて頂き、戦地での話、帰還後の話、人間的な本音など、子供の私によくわかるように話してくれた。新聞に大きく載るほどの武勲をたてた人で、自分の部下、捕虜にした敵兵の家族のことなど、誰に対しても常に公平で温情に満ちた言葉で話してくれた。私は人というものはかくあるべきと思いが知らされ、以後感謝とともに尊敬している。

●常にプラスの前進を

当時つらい経験はしたもの、今日までそのことに疑問を感じたり、真剣に考えたことはなかったような気がする。また戦後進駐してきたアメリカ兵にも、少し前まで自分たちを苦しめてきた憎い敵、という感情は持たなかったように思う。人の心はその時の状況や現実には馴染んでしまうものなのかもしれない。だから過去は過去として、自分の過去の経験に対して、マイナスに後戻りすることは避けなければならないと、若い人たちに心してもらいたい。

●自分の生死に他人の指図はいらない

人間を含め、生き物は必ず一回は死ぬ。しかしなぜ、恨みもない、顔も知らない相手に殺されなければならぬのか。これが公然と通用するのが戦争に関わる死である。今でも世界のあちこちで勝手な指導者の都合でこの現実が通用している。間違った指導者に自分の未来を絶対に預けて

はならない。日本、世界に関係なく志を共にする仲間と生きてもらいたい。自分の死に他人の指図はいらない。ただ自分のため、他人のために、納得のいく人生を考えて生きてもらいたいものだと思う。

●若者に私の思いを伝えたい

若者に私の経験や思いが伝えられたらと、いま人生の最晩年にかかり、このことを意識し始めた。ささやかながら、市民運動で世の中に何かを返そうと、行政の都合に逆らって忙しい日々を送っている毎日である。

これは若いときの無関心を埋めようなどと考えている訳ではなく、ただ次世代の若い人の将来に少しでもプラスになればよい、一般市民の将来に役立てばよいという、ただそれだけのことである。

私は今までの人生のうち、いい思い出だけで暮らしたいと思っていた。しかし、悲しい思い出、つらい思い出があるのも事実だ。たとえば、今述べた空襲の悲惨な思い出などである。しかし、そこから反省や教訓を導き出してこそ、世のため、人のためとなる行動が生まれてくるものと思う。いま私が若い世代の人に望むのは、「いつも世の中をよく見てほしい」ということである。若者の行動がこれからの社会を方向付けていくこと

を忘れないでほしい。再びあの悲しい過去に戻ってはならない。権力を持つ指導者のいうことを鵜呑みにせず、世の中をよく見て、自分の頭で考え、自信をもって行動してほしい。そうすれば晩年の悔いや反省は少なくなり、自然に明るい未来が約束されると思う。

【参考】日本本土空襲

太平洋戦争（大東亜戦争）期、連合国軍、事実上はアメリカ軍が日本各都市に対して行った空襲、戦略爆撃である。アメリカ軍による攻撃は、特に一九四四年（昭和19年）末頃から熾烈となり、最終的には無差別爆撃（じゅうたん爆撃）として行われた。

攻撃は、B29に代表される戦略爆撃機による爆撃のみならず、機動部隊艦載機や硫黄島などから飛来する機体による爆撃や機銃掃射というかたちでも行われた。また、航空戦力によってだけではなく、沿岸部の都市では艦砲射撃によっても攻撃されたところもある。

空襲は一九四五年（昭和20年）8月15日の終戦当日まで続き、全国（内地）で200以上の都市が被災し、死傷者数は各説あるが100万とするものもあり、被災人口は970万人に及んだ。被災面積は約1億9100万坪（約6万4000㍍）で、内地全戸数の約2割にあたる約223万戸が被災した。その他、多くの国宝・重要文化財が焼失した。（ウイキペディアより）